

## 創刊によせて ～府立大学国際交流の現状と今後の展望～

京都府立大学国際交流委員会 委員長  
公共政策学部 教授 川瀬 光義



ニュースレターの創刊に際し、筆者のささやかな経験を踏まえて、国際交流の意義について

考えてみたいと思います。

筆者は2012年9月、本学と長年にわたり友好関係にあり、学生・教員の相互訪問をおこなってきた中国の雲南農業大学および西安外国語大学を、渡辺信一郎学長(当時)、久保康之生命環境科学研究科教授とともに訪問する機会に恵まれました。

その数ヶ月前に石原慎太郎都知事(当時)が、尖閣三島を買取って船着き場をつくるなどの意向を示したことを契機として、日中関係はかつてなく険悪な状況にありました。私どもが出発する直前の9月11日に日本政府が尖閣三島の「国有化」を発表すると、中国各地での抗議デモが激しくなりました。私どもが西安に到着する頃にはそれがピークを迎え、予約したホテルが襲撃されたため宿泊できなくなりました。しかし、西安外国語大学の皆さんの暖かい配慮によって別のホテルに泊まることができ、当初の予定を滞りなく終えて無事帰国しました。

帰国して驚いたのは、まるで戦場から帰ったかのように無事を喜んでくれた周囲の人々の反応です。無論それは、私どもの身の安全を心配した善意によるものです。また、日本のマスコミ等の報道ぶりをうかがうにつけ、多くの日本

人がまるで中国中が反日デモに席卷されているかのような認識に至ったのはやむを得ないかもしれません。しかし筆者は強い違和感を感じました。約1週間の中国滞在中の市内の移動は、もっぱら自動車によるものでしたが、筆者なりに町の様子を観察した限りでは、デモで荒れているなど微塵も感じませんでした。

周知のごとく最近の日中関係は、首脳外交が長期間おこなわれないなど、1972年の国交回復以来最悪です。一部の過激な現象が針小棒大に伝えられ、お互いのことを知らないまま誤解が積み重なっているとしたら、まことに残念というほかありません。

しかし、よくよく考えてみれば当たり前なのですが、中国の多くの人々はごく普通の日常生活を送っているのであり、日本と事を構えることをよしとする人はほとんどいないはず。また、筆者が専攻する公共政策に関しては、深刻な大気汚染など経済成長にともなう負の側面をどう克服するか、都市化と少子化がすすみ高齢者の比重が急速に高まる中で福祉政策をどうするかなどについて、日本の経験を学び交流する機会を求めているはず。

共通する課題について真摯に学術交流をすすめ、人と人のつながりを深めてゆるぎのないものとする。地味ですが、ここに大学人としてすすめる国際交流の果たすべき役割があると考えます。



### 事業報告



## 留学交流会を開催しました。

平成26年5月21日(水)に京都府立大学国際交流委員会と府大生協共催で、留学交流イベント「羽ばたけ 府大生!」を開催しました。教員2名、学生33名(うち留学生4名)の方々にご参加いただき、第1部では、外国人留学生・短期日本人留学経験者・長期日本人留学経験者・青年海外協力隊経験者(ゲストスピーカー)にスピーチをいただきました。実際に体験した国際交流の体験報告は、興味深く非常にバラエティー豊かで、様々な形の国際交流があるのだ、ということが伝わったのではないかと思います。

第2部では、人気の高いドイツ・レーゲンスブルク大学サマースクール経験者の方々にもご協力をいただき、参加者は思い思いの留学経験者のもとに集まり、体験談を熱心に聞いていました。ご協力いただいたアンケートでは、留学・国際交流・留学生との交流に興味があった、もっと留学関連や国際交流のイベントを行って欲しいとの要望が寄せられました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

## 体験談

## 留学交流会協力学生の声

**貂 硯伊 日本・中国文学科 4 回生**  
 (西安外国語大学留学生)


私は西安外国語大学日本語学科 2 年生の時、日本への留学試験に参加した。まず、チャンスとして挑戦したかったこと、更に、実際に日本に行って、真の日本社会と文化を自分の目で見ないと、もったいないと思ったこと、そして、留学を通じて強い人間になりたいと思ったことから。私は試験に取り組んで、休まず準備していたところ、幸運にも試験に受かり、京都府立大学に来ることができた。

私は日本に来られて良かったと思っている。京都の文化財、祭、美しい桜や紅葉を満喫し、交流ツアーや修学旅行などにも参加して良い思い出になった。友達もたくさんでき、日本人の友達との交流が様々な勉強となり、視野も広げられる留学の間、様々なことを経験し、自らの認識や自主性、主体性も鍛えられ、更に挫折を通して物事を前向きに考えられるようになった。

今回の留学交流会に参加できて楽しかった。自ら留学の面白さと辛さを聞いて共感した。そして国の異文化も感じられた。留学は一生忘れられない思い出として、私たちに豊かな経験を与えてくれる。だから、皆さん、勇気を持ち、頑張って歩もう！

**澤山 敏子 生命環境学部環境デザイン学科 3 回生**  
 (オーストラリア・メルボルン 3 週間留学)


澤山さん：左

春休みに 3 週間、メルボルンに留学をしてきました。本当は一つ前の夏休みにいく予定でしたが、いざ行くことを考えると不安でいっぱいになり、あきらめてしまいました。

しかし、行かなかったことにずっと後悔していました。絶対に春休みに行く！と決め、無事に行くことができました。

わたしは 20 年間、日本を出たことがなく飛行機も乗ったことがありませんでした。初めての海外体験は全てが新鮮で、全てが楽しかったです。楽しいことばかりではなく、不安な気持ちになったり、怖い思いをしたこともあります。せっかく海外に来れたのだからその状況を楽しもう！と思い、毎日充実した日々を過ごせました。

このような前向きな気持ちでいられたのも、自分が本当に行きたいと思った時に行くことができたからだと思っています。

留学準備をする上で、沢山の人に支えられていると感じました。皆にありがとうと伝えたいです。

**松井 高子 生命環境学部農学生命科学科 2 回生**  
 (アメリカ合衆国サンタバーバラ 11 ヶ月留学)


松井さん：一番左

私が長期留学を選んだのは、両親の承諾があったことが一番大きな理由です。それまで旅行でも海外に行ったことが無かった私にとって、11 か月のアメリカ滞在は大きな挑戦でした。特に大変だったのは、食事です。ホストファミリー宅での夕食は、とても体調が維持できるようなものでは無かったので、栄養がバランス良くとれ、できるだけ美味しいものを探すのに苦労しました。しかし、キッチンが使えなかったため、かなり限られた食生活の中で体調を崩すことも多々ありました。

英語に関しては、ヨーロッパ系の言語文化の人たちと比べると不利な状況にあるなかで、最初は悔しい思いや歯がゆさを感じることも多かったですが、必死で向き合い続けるうちに、楽しさや自信が生まれました。

日本にいれば経験せずにすんだ苦労のなかで見つけた友人、育てた絆は未来に繋がる宝物です。自分自身も精神的に大きく成長し、強く柔軟な思考ができるようになりました。苦労を笑って楽しめるようになったのかもしれない。

留学交流会では、十人十色な留学経験が聞けたので興味深かったです。留学志望者が増えていることも、とても嬉しいことでした。個性あふれる留学体験が聞けることを楽しみにしています。

## レーゲンスブルク大学語学研修の取り組み



文学部 教授 青地 伯水

ミュンヘン空港からフライジング行きのバスに15分ほど乗り、終点でドイツ鉄道に乗り換えるとレーゲンスブルクまで1時間ほどです。

今なら、レーゲンスブルクに行きたい人に、こう教えることができる。ところが2011年8月、レーゲンスブルク研修を始めたときには、参加学生には悪かったが、暗中模索であった。

引率者は3月に下見に来たとはいえ、通貨がユーロにかかわって初めてのドイツ、不案内このうえない。このときは夜に到着し、ミュンヘンに一泊して翌朝目的地へ向かった。それゆえ、レーゲンスブルクには空港からミュンヘン中央駅経由と思いきや。さて本番8月、近郊鉄道(Sバーン)で中央駅まで35分、一月分の生活用品が詰まった重いトランクを23名の学生に押しせながら、ようやくドイツ鉄道に乗り込んだ。フライジング駅を通過したはずだが、そんな町を知る由もなく、3時間かけてレーゲンスブルク駅に到着した。大きな荷物で市民に迷惑がられながら、大学行きの市バスに乗り込んだ。

ミュンヘン空港はミュンヘン市の北、レーゲンスブルク寄りに位置すると、さすがに2年目(2012年)には分かっていた。レーゲンスブルク大学の担当者に依頼して、迎えのバスを出してもらった。バス代に350ユーロ(当時は円高で35,000円)払ったが、空港から大学まで90分くらいで到着する。3年目の2013年には、なんとバス代をレーゲンスブルク大学がもってくれた。そして今年(2014年)は、レーゲンスブルク大学担当者から、バスでお迎えにあがります



ので、京都府立大学ご一行のミュンヘン空港到着時刻をお知らせ下さい、との照会があった。ずいぶんかわったものである。

この変化が象徴するように、本学とレーゲンスブルク大学との関係は、発展しつつけている。昨年11月には、レーゲンスブルク大学言語コミュニケーションセンターの「外国語としてのドイツ語」科長トーマス・シュタール博士が来学し、文学部と学術交流協定を締結した。また今年度後期には、シュタール博士自らが非常勤講師として集中講義「ドイツ語インテンシーフ」を担当する。学生が居ながらにして、現地ドイツ人の授業を受けられることは、ドイツ留学への弾みとなるだろう。また、レーゲンスブルク大学は、1セメスター授業料530ユーロ(約75,000円)でドイツ語コースに学生を受け入れてくれる。すでに本学の学生1名が学んでいる。私のことをいえば、昨年度レーゲンスブルク近郊の温泉パート・アプパッハの調査をし、宮津市でのACTRシンポジウムで報告をした。いずれも3年前には考えられなかった。

本学の学生にドイツ語力を向上させたい、ドイツの町にいる緊張とときめきを体験させたい、との思いからこの研修を始めた。のべ62名(3名のリピーター)の学生が参加し、全学部の学生がレーゲンスブルク大学で学んだ。より多くの、そして全学科にわたる学生に参加してもらえようこの研修をいっそう充実させ、育てていきたい。



## レーゲンスブルク大学語学研修に参加してみても

文学部欧米言語文化学科 3回生 岩田 有里

飛行機での長旅を終えてミュンヘン空港に降り立ち、そこからさらにバスで移動した先にあるのが、レーゲンスブルクの街である。到着したその日から生のドイツ語とふれあい、本当にここで生活してゆけるのだろうか、わたしは不安に思った。しかし、そんな不安も忘れるほどにドイツでの日々はめまぐるしく、そして楽しいものであった。

大学では、世界中から集まった学生たちとともにドイツ語で授業を受け、地元の学生たちと交じって学食で食事をとり、ドイツの「学生」として過ごす。授業が終われば、ドナウ川沿いの旧市街へと繰り出した。情緒溢れる街並みを写真におさめて回り、お洒落なカフェでケーキを食べる。本屋を物色して興味をそそられる本を買い求めたりもする。ひとりの「観光客」としてドイツの街を眺めた。夕方になるとスーパーで食料を買い込んで寮へと帰る。洗濯を回したり、宿題をしたり、はたまた溜まったゴミを出しに行ったり。ここではドイツで「生活を送る人」になるのだ。

レーゲンスブルク研修では、このようにいろいろな立場から外国の街を眺めることができる。一か月という、短くも長くもあるこの期間だからこそできることなのかもしれない。わたしはこの研修を通して、ぼんやりとしていた「ドイツ」にはっきりとした輪郭をつけることが出来た。このことはこの先の学生生活において、大いに役立ってくれると信じている。





## 平成 25 年度 国際交流協定校との交流状況

国際交流協定校一覧 ※25年度締結校	主な交流実績
サスカチュワン大学 (カナダ)	協定更新等について協議予定。
ラヴァル大学 (カナダ)	現地視察・ケベック州政府東京事務所 40 周年記念事業への協力・森林保全シンポジウムの開催。
西安外国語大学 (中華人民共和国)	教員の受入・派遣・学生の受入・派遣 (日本語教師)。
雲南農業大学 (中華人民共和国)	学生の受入 (長期・短期)。
昆明理工大学 (中華人民共和国)	科学研究費補助金採択。
上海交通大学 (中華人民共和国)	日中学術交流会議開催と協定更新を目指す予定。
キングモンクット工科大学トンブリ校 (タイ王国)	共同研究・研究報告会・学生の交流。
Mahidol 大学 (タイ王国) ※	教員の交流。
国立雲林科技大学 (台湾)	学生の受入・講演会等。
財団法人京畿開発研究院 (大韓民国)	講演会・セミナー等。
タデユラコ大学 (インドネシア共和国)	日本学術振興会二国間交流事業共同研究による研究者の相互訪問。
ウィーン農科大学 (オーストリア共和国)	Thomas Rosenau 教授の受入 (セミナー開催)。
レーゲンスブルク大学 (ドイツ連邦共和国) ※	レーゲンスブルク大学サマースクールへの学生派遣。
ガーナ大学 (ガーナ共和国) ※	JST-JICA 補助金への共同申請。

### 平成 26 年度

#### 国際交流委員会委員

川瀬 光義 委員長 (公共政策学部教授)  
 椿 一典 副委員長 (学生部長・  
 生命環境科学研究科教授)

上田 純一 委員 (文学部教授)  
 中根 成寿 委員 (公共政策学部准教授)  
 長島 啓子 委員 (生命環境科学研究科助教)  
 堀口 智史 委員 (学務課長)  
 桐村 光彦 委員 (企画課長)

#### 【事務】

蔵田 由依子 (企画課)  
 川崎 さわか (企画課)

発効日 2014 年 6 月

発行責任者 国際交流委員会委員長

〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町 1-5

TEL: 075-703-5905 Email: IECC@kpu.ac.jp

#### 読者の皆さんと一緒に作るニュースレター タイトル募集のお知らせ

国際交流委員会 NEWSLETTER  
タイトル募集!

このニュースレターは、読者の皆さん  
とともにつくっていきたくて考えていま  
す。そこで、このニュースレターのタイト  
ルを募集します。

例) KPU 国際交流通信  
国際交流 PRESS など。

府立大学のカラーや京都のイメージ  
などからステキなタイトルを思いついた  
方は国際交流委員会までお寄せくださ  
い。

採用された方には図書券をプレゼン  
トします。

応募者多数の場合は国際交流委員会にて選考  
します。